

R.I. 2019年卒 地域マネジメントコース

こんな学生時代を過ごしました

私の大学生生活の軸は、「地域活動」と「実践的な学び」でした。思い描いていた大学生活よりも遙かに忙しい日々でしたが、その全てが、社会に出るための確かな土台になったと確信しています。特に熱中したのは、1年次から3年次前期までの実習活動と地域活動です。私は、小倉活性化プロジェクト「Kokulike」に参画しました。この活動では、小倉の魅力を発掘・発信するWEBメディアをSNSで展開する中で、チームのリーダーも経験しました。社会人や飲食店への取材、記事の作成、SNSでの情報発信といったタスクをチームメンバーと協働しながら推進。さらには、紙媒体のパンフレット制作や、地域飲食店と連携したコラボレーションイベントの実施といった多角的な活動にも取り組みました。



他にも、グリーンバードでの清掃活動、まちの案内ボランティア、マルシェの企画や祭りへの出店など、様々な経験を積むことができました。このほか、学外でも先輩や友人の紹介をきっかけに、様々なイベントなどに参加し、貴重な経験やたくさんの人との繋がりを得ることができました。こうした活動を通し、机上の学びだけでは得られない「地域の大人との関わり方」や、「多様なメンバーと連携しながら企画を実現するチームマネジメント力」を身につけられたと思います。3年次に挑戦したチャレンジプログラム「リアル就職プログラム」では、地域に根ざした働き方を知ること、就職活動への不安を払拭することを目的に参加しました。このプログラムでの大きな収穫は、「働く」ということの解像度が上がったことです。実習や地域活動を通じて、自分自身のやりがいや、仕事に対する価値観が明確になりました。また、越境して宮城県女川町という遠い土地へ飛び込んだことによって、さまざまな人の価値観に触れ、視野が広がったと感じています。

プロジェクトの目的を再考し、企画運営を行なったマルシェ。チームの認識や目標を揃えること、そして、PDCAサイクルを回すことの難しさを実感した。

卒業後こんなキャリアを歩んでいます

在学中の4年次10月から、私は特定非営利活動法人アスヘノキボウで社員としてキャリアをスタートさせ、現在は主に広報・渉外担当として働いています。

具体的な業務は、プレスリリースの作成と配信、メディアとのコミュニケーション、各種情報発信がメインです。組織が小さいため、プログラム集客のためのSNS広告運用、事業担当者のサポート、そして人材育成まで、多岐にわたる業務に携わっています。

地域創生学群で学んだ「企画力」や「プロジェクトマネジメントの経験」は、今の仕事に直接活かしています。学生時代、地域活性化の「情報発信」に取り組んだ経験は、現在の広報活動において、「誰に」「何を」「どう伝えるか」という視点を養う土台となりました。

広報担当としての具体的な成果の1つは、復興まちづくりをテーマにした全国放送の特集番組に、私たちが拠点とする女川町や組織の取り組みを紹介していただいたことです。実際、その反響を肌で感じることができました。



学生時代勇気を持って飛び出したことで、令和4年度総務省「ふるさとづくり大賞」において、「団体表彰」を受賞するという貴重な経験もできた。

現在の仕事で最もやりがいを感じるのは、自分の作成したリリースが取材に繋がり、それが記事や放送となって世に出る瞬間です。この達成感は大きく、学生時代に感じていた「誰にでもできる仕事ではない仕事をしたい」という思いが達成できていると感じています。素晴らしい取り組みを世に広める役割を担うことで、組織の大小に関わらず大きな価値を生み出せているという実感があります。

将来のビジョンについては、具体的な地域や仕事を一つに絞ってはいません。今の地域で仕事を続けるか、新たな場所へ移るかはまだ分かりません。しかし、「自分の仕事と社会とのつながりを意識する」ことだけは、これからもやめたくないと考えています。社会へ影響を与える仕事を通じて、価値を創造し続けるキャリアを歩んでいきたいと考えています。

現役生へのメッセージ

地域創生学群での学びは、座学以上に実践と経験が力になります。在学中、ぜひさまざまな活動に「越境」して参加してみてください。ただし、他人の意見や価値観を全て鵜呑みにする必要はありません。活動や経験の中で生じた「自分のモヤモヤ」にはしっかり向き合うこと。多くの人のお話を聞き、その上で、自分で選択し、その選択に責任を持つことこそが、将来のキャリアを切り開く原動力になります。この自由で実践的な学群で、ぜひ悔いのない学生生活を送ってください。

(2025年11月28日執筆)